



いなどめ ゆうだい  
稲留 雄大 さん (29)

山崎地区出身。20歳のときに知り合いが社長を務める造園会社に入社。27歳で独立し、株式会社ガーデンライクを設立する。妻と共に3人の子育てに奮闘中。



Instagramで仕事の様子を随時配信。



庭師  
×  
稲留  
雄大

▼ローズマリーにレモンユーカリ、イワダレソウやカンズゲなど、多様な植物の名前と特徴をよどみなく説明する稲留雄大さんは、29歳の気鋭の庭師。その巧みな技で植物や石を調和させ、日常の中に四季の変化に富む美しい風景を生み出します。

▼稲留さんは、山崎地区に事務所を構える株式会社ガーデンライクで代表取締役を務めています。庭作りや、フェンス設置、駐車場舗装など外構と呼ばれる分野を専門とする同社。特に庭作りでは、1級造園技能士の資格を持つ稲留さんの技が光ります。

「庭は全体のバランスが重要です。限られたスペースの中でお客様が望む空間を演出するため、植物の種類や配置を考えながら作っています」と話す稲留さん。剪定の際に迷いなくはさみを入れる姿は、一見簡単にこなしているようですが、高度な技術と豊富な知識が必要だと言います。

「剪定は単に枝葉を切って整えるだけでなく、適度に日光や風を通すための隙間を作る作業でもあります。植物によって成長の速度や枝の張り方、葉の付き方は様々なので、それぞれの特徴に合った剪定が必要です。たくさん種類の植物を覚えなければならぬので日々勉強ですね」と努力を惜しみません。



剪定で使うはさみ。見た目は小さいですが、使い方次第で太い枝も簡単に切ることができます。



稲留さんが手掛けた庭の一角。石灯籠と植物を組み合わせ、モダンな中にも和を感じさせる景観に。

▼幼い頃から近所の山で植物や虫とたわむれてきた稲留さんは、昔と比べて自然と触れ合える環境が減った今こそ、庭を通して植物と共に暮らす魅力を知ってほしいと話します。

「木や花を育てると、剪定の手間が増え、虫も寄ってきます。しかし、剪定が必要なのは植物が成長している証ですし、虫のおかげで花粉が運ばれて新たな種が生まれるんです。そうした命の営みに触れ、自然を身近に感じてもらえるような庭を作っていきたいです」と語る稲留さん。

人と自然をつなげる庭を追い求め、若き庭師の挑戦は続きます。